

I 畜産の概況

1 畜産の動向

16年度の畜産物の消費量は、海外のBSEや鳥インフルエンザで牛肉、鶏肉が減少

牛肉の需要量は、15年12月の米国のBSE発生による牛肉の輸入一時停止措置の影響を受けて15年度は前年度を3.0%、16年度は同10.9%下回った。また、鶏肉の需要量も国内外における高病原性鳥インフルエンザの発生により15年度は前年度を2.6%、16年度同2.2%それぞれ下回った。一方豚肉は、これらの代替需要などにより、15年度の需要量は前年度比2.6%増、16年度同3.3%増と増加した。

「食料・農業・農村基本計画」（17年3月閣議決定）においては、27年度における望ましい食料消費の姿として牛乳・乳製品95キログラム（うち飲用39キログラム、乳製品55キログラム）、牛肉7.7キログラム、豚肉8.8キログラム、鶏肉9.1キログラム、鶏卵16キログラムとしており、牛乳・乳製品の増加を見込んでいる（図1、2、P.147）。

畜産物の家計消費量（全国1人当たり）についてみると、牛肉は14年度に回復傾向で推移したものの、15年度は北米におけるBSE発生の影響により再び前年度を下回った（▲3.7%）。16年度に入っても米国などからの輸入一時停止措置が継続したことから前年度を6.4%下回った。

豚肉は14年度まで5年連続して前年度を上回ったが、15年度は前年度を下回った（▲0.4%）。

16年度は牛肉、鶏肉の代替需要から再び増加に転じ、前年度を3.5%上回った。鶏肉は14年度に牛肉の代替需要により前年度を1.2%上回ったが、15年度は、国内外における高病原性鳥インフルエンザの発生により減少し、前年度を下回った（▲5.3%）。16年度に入り回復傾向で推移し、前年度を1.5%上回った。また、鶏卵は近年安定的に推移していたが、高病原性鳥インフルエンザの発生による供給量の減少などから、16年度は前年度を5.9%下回った（図3、P.148）。牛乳およびバターの家計消費（全国1人当たり）についてみると、牛乳は8年度以降減少傾向であったが、14年度は前年度を4.6%上回った。しかしながら、他の飲料との競合などから減少し、15年度は前年度比1.5%減、16年度1.6%減と2年連続で減少した。バターも9年度以降減少傾向で推移しているが、16年度は前年度を2.6%上回った（図4、P.148）。

畜産物の生産量は、15年度に豚肉、鶏肉が前年度をそれぞれ1.6%、0.8%上回ったものの、牛肉は、13年度の出荷自粛の影響からかなりの程度上回った前年度を1.9%下回った。16年度は、牛肉・鶏肉が前年度並みとなったものの、豚肉は前年度を0.8%下回った。鶏卵の生産量は、近年横ばいで推移しているが、16年度は前年度を2.8%下回った。牛乳・乳製品の生産量は15年度は前年度を0.4%上回ったものの、16年度は前年度を1.4%下回った（図5、P.147）。

食肉の自給率は、微減傾向で推移しているが、16年度（速報）で55%となり、前年度を1ポイント上回った。牛肉、鶏肉とも輸入一時停止措置などから前年度をそれぞれ5ポイ

ント、2ポイント上回る44%、69%となった。豚肉、鶏卵、牛乳・乳製品については前年度を下回るそれぞれ51%、95%、67%となった（図6、P.147）。

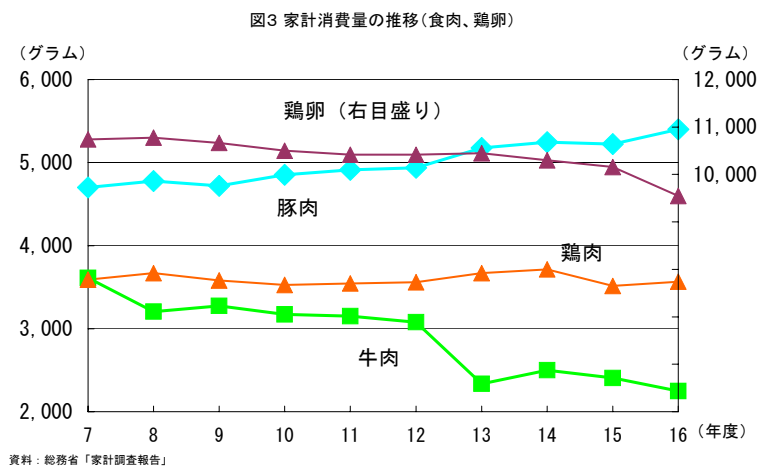
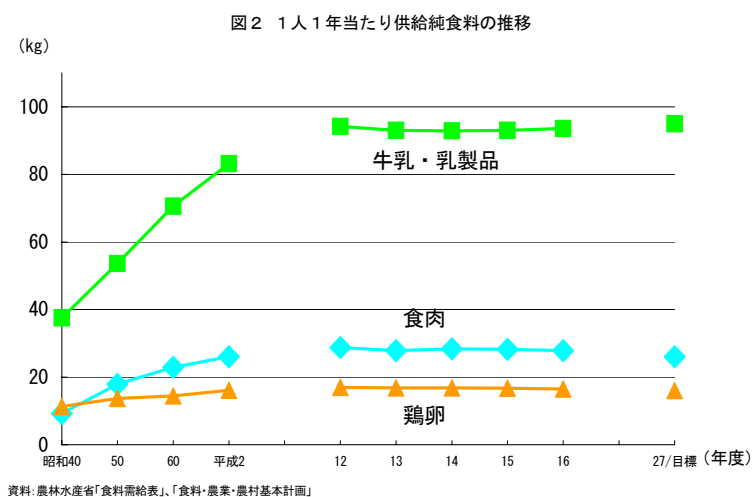
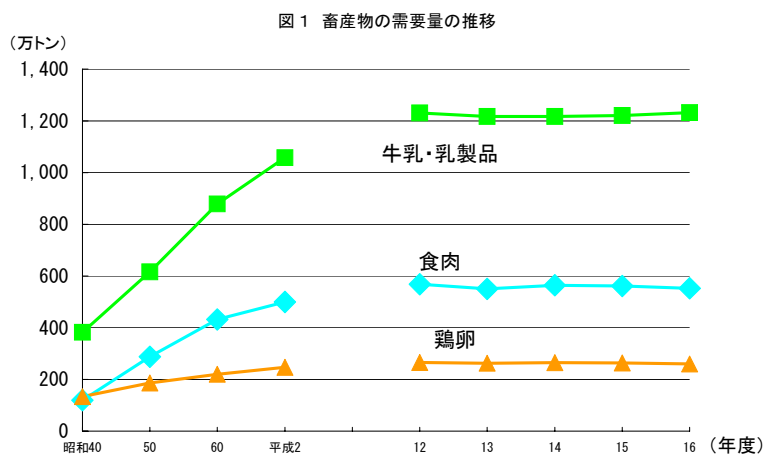


図4 家計消費量の推移（牛乳、バター）

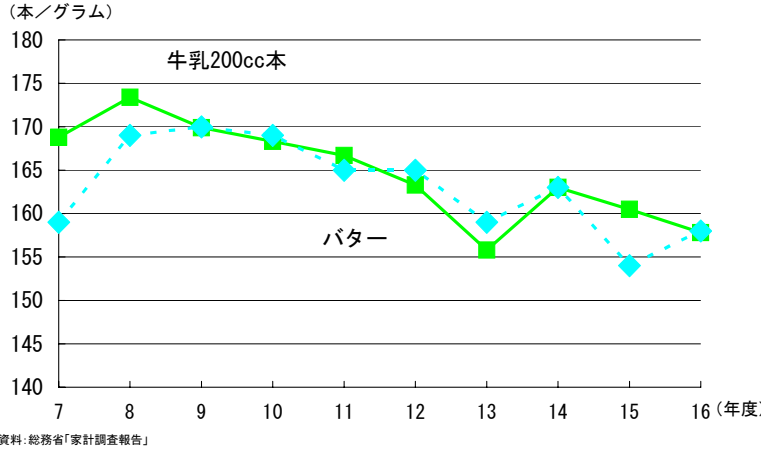


図5 畜産物の生産量の推移

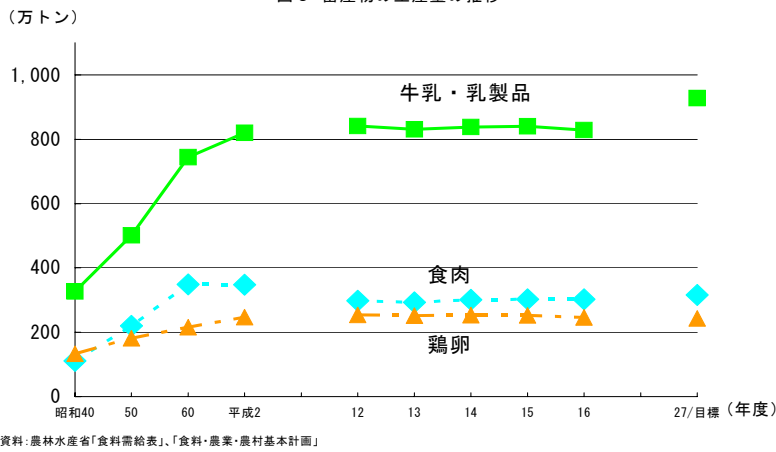


図6 畜産物の自給率の推移

